

# 火花

第 22 号

1983, 4

- ◎マルクス批判によるマルクス以前への回帰  
——白川真澄『もう一つの革命』批判—— 1
- ◎権力分析 No. 8  
——クーデターとプロレタリアートの闘い—— 7
- ◎綱領関係文書の公表について 13
- ◎運動報告  
——3・27三里塚集会報告＝「分裂」集会はなにを示しているか—— 15

共 産 主 義 者 同 盟（火花）

火 花

第 22 号 1983, 4

共產主義者同盟(火花)

## マルクス批判によるマルクス以前への回帰

——白川真澄「もう一つの革命」批判——

はじめる

三里塚闘争の分裂は政治的にみれば、第四インター、赫旗派等と中核派に代表される部分との間の分裂である。ところで、この情勢の中で、政治的には前者に属しながら、一種のマルクス葬送派として独自の策動を展開している諸君がいる。共労党—プロ青の諸君である。

彼らは「自由」「連帯」「コミュニケーション連合」等の主張をもって、労働者大衆の中に幻想をもちこもうとしている。

▲国際的にみれば、この諸君は帝国主義による地球的規模での環境破壊への反発、戦争にたいする危機感、またソ連等への幻滅等に依拠して一つの流行の思想となつてゐるエコロジー運動の流れに属する。彼らの出生からいえば、構造改革派の六〇年代・七〇年代をつうじての一つの帰結である。

中核派の政治の破産があたりかとなり、その無能力性が露呈されているいま、彼らを根本的に批判し、労働者大衆への影響力を一扫することはわれわれの「神聖」な義務である。この作業の一つとして

このことは実は、氏が、この現実の社会をもつば現象的にしか把握していないことを示す。すなわち、社会の諸矛盾を、その根本において貫徹している経済的法則やその運動から説明せずに、近代といった抽象的な規定から説明している。

しかし、プロレタリアートが「現代社会主義」の問題において達着しているのは世界革命・民族問題・工業と農業等、きわめて具体的に現実的な問題である。したがって、資本主義・帝国主義にたいする根本的批判（経済的運動法則の解明を基本とする）を基礎において、これらの諸問題に具体的な解答をだすことがもたらされてゐる。

この点からいって、氏の「近代」という視点は「現代社会主義への批判」としてはまったくあてまいであるといわねばならない。しかるに、氏にあっては「近代」を万能の尺度として用い、ここから、マルクスの総括へとすすむ。

### ② マルクス総括の誤り

氏の総括視点はこうである。「機械制大工場の分業的な協業様式として編成された生産や生産力編成のあり方を共産主義は引きつぐのか、それとも解体してまったく別の生産のあり方に編成しなおすのかという点」（P二二二）。そして「マルクスの場合には、機械制大工場が新しい社会建設の物質的土台になるという命題……と、機械制大工場の労働システムが実際には労働のすさまじい疎外をもたらすのだという批判的見方との間に、非常に大きな不整合を残している」（同）と批判する。

つまり、氏はまず、共産主義にひきつぐべきでない対象として、

て、われわれは共労党指導者である白川真澄氏の『もう一つの革命』を批判する。ただし、今回は綱領上の原則に限定してそれをおこないたい。

### Ⅰ 近代について

#### ① 尺度の抽象性

氏は「現代社会主義への批判は近代の批判である」（『もう一つの革命』社会評論社、P八八—以下ことわりのない場合、すべて同書—）を根本視点とする。つまり、氏は氏自身が「現代社会主義」と規定するところのソ連・中国等の問題点を、近代を批判しえないことにもとめる。したがって、近代をどう定義しているかが問題となる。

「近代とは、資本とその近代的生産力、中央集権的な国民国家、近代合理的な知を、その主体とする世界である」（P一八七）。氏が具体的な告発対象としているのは「近代的工場」「近代的生産力体系」「近代的合理主義」「中央集権国家」等である。

「分業的な協業様式として編成された生産や生産力編成のあり方」を告発する。ついで「機械制大工場が新しい社会建設の物質的土台になる」点とそこにおける労働の「疎外」との関係の整理が「不整合」とマルクスを批判するのである。

しかし、マルクスにとっては「機械制大工場の分業的協業」それ自体が問題だったのである。問題だったのは、労働過程が「分業的協業様式」としてあらわれる資本主義的生産関係である。その意味では、氏とマルクスとは資本主義批判の質を異にしている。

また、マルクスは「新しい社会の物質的土台」を「機械制大工場」にもとめたわけではない。そうではなく、機械制大工場等にもたらされるような、技術の改善によつてもたらされる労働の社会化にこそ、——物質的生産および流通の手段を集積させ、資本主義企業における労働過程を社会化することに土台の一つ（一つというものは、「新しい社会の物質的土台」というとき、プロレタリアートの登場とその成長、資本主義の発展そのものによつて教育され訓練されること等をぬきにしては、それは語れないからである）をみている。

もちろん、マルクスが「分業」や「疎外」を「労働システム」を、労働者の経済的解放をめざす共産主義革命において「引きつぐべきもの」と考えていなかったのは『ゴータ綱領批判』等を見ればあきらかである。ただ、違つてゐるのは、氏が現在の「労働システム」はけしからん、「疎外」がある、ひきつぐべきでない等々の道徳的感情から出発している——ちょうど空想的社会主義者と同様に——のたいし、マルクスは科学的な資本主義批判をもつて、プロレタリアートが資本主義に比べてより高度な労働の社会的組織の型を代表し、実現する能力をもっていることをあきらかにし

た点である。

氏がマルクスの二つの命題としているのはまったく恣意的であり、その批判はまったく的はずれである。

これはレーニンの闘いや、中国プロレタリア文化大革命の評価においても同様である。

## II 官僚主義との闘争について

### ① レーニン主義にたいする一知半解

氏は「官僚主義にたいするレーニンの闘いがもっていた非常に大きな不十分性という致命的限界」を「官僚主義にたいする闘い」ということと資本主義にたいする闘いということが切斷されているという問題」(P二〇九)におく。そのさい、根拠を「テラシステムを積極的に導入」したことにともめている。

ロシア革命が権力奪取後も、きわめてジグザグしたものであったことは工業化論争・ネツプ論争・労働組合論争等が示すとおりである。その限りで、レーニンの歴史的限界に言及するのはそれほどむずかしいことではない。

しかし、ジグザグの過程を一つとりだして、官僚主義との闘争と資本主義にたいする闘いとの切斷を説明しようとするのは子供じみている。というのも、専門的に教育・訓練された労働者の不足に規定され、ブルジョア専門家や旧官吏の利用を余儀なくされる中で登場した新たな官僚主義にたいし、「コミューン原則からの後退」「官僚主義的に歪曲された労働者国家」ととらえ、闘争したのは他でもなくレーニンだからである。ではこの闘争と資本主義にたいする

闘争との関係はどうか。

レーニンは『量は少なくとも質のよいものを』の中で、ロシアの文化的後進性と小生産の分散性の影響にその根拠をもとめ、官僚主義を克服する方向を提起した。しかし、それだけではない。資本主義との闘争との関係でいえばなによりも、「階級の廃絶」をめざす闘いの中に位置づけている。

「階級を廃絶するためには第一に、地主と資本家を打倒することが必要である。われわれは任務のこの部分を遂行したが、これは部分にすぎず、しかももとも困難な部分ではない。階級を廃絶するためには、第二に、労働者と農民の差異をなくし、すべての人々をはたらく人になければならない。……それは社会全体の組織的改造によって、個別的な孤立した小商品経済から社会的大規模経済への移行によってはじめて解決することができる。……このような移行は性急で慎重さを欠く行政的および立法の方策によってはかえっておくられ、困難にさらされるだけである。農民が大規模に農業技術全体を改善し、それを根本的に改造することができるような援助を農民にあたえることによって、はじめてこの移行を促進することができる。」

(『プロレタリアートの独裁の時期における経済と政治』レーニン全集第三〇巻所収)

すくなくとも、氏はレーニンの闘いをこのようなトータル性において検討すべきであった。そうすれば、官僚主義との闘いと資本主義との闘いとの「切斷」といった評価はでてこなかったはずである。この評価はただ、氏のレーニンにたいする一知半解を暴露しているにすぎない。

ところで、この点はこれくらいにしておくとして、氏自身は官僚主義とどのように闘争するのだろうか？ それは中国プロレタリア革命の思いいれから提出されている。

### ② 無政府主義との融合

氏は中国プロレタリア革命を「コミューン連合形成の試みとへ国家への支配の論理の衝突」(P九三)とみる。そして、「プロレタリア革命は、党和国家官僚体制の支配を打倒し、コミューンとその連合に基礎をおく新しい政治形態を人民の手で創出する運動」(P九四)と評価する。ここで氏のコミューンの概念は、パリ・コミューン以降、マルクス、レーニンによって使用されてきたそれ——すなわちプロレタリア独裁国家のコミューン原則(官吏の選挙・リコール制・労働者なみの賃金、全人民的武装等)——としてではない。むしろ、国家以前の「共同体」的なものであり、国家にたいするアンチテーゼである。問題はここにある。氏はあきらかに、国家一般にたいしてコミューン一般を対置している。

したがって、氏にあっては国家一般が「悪」なのであり、ブルジョア独裁国家とプロレタリア独裁国家の区別は存在しない。これは無政府主義者の主張でなくてなんであろうか。

また、コミューンにしても、イスラエルのキブツと、ロシア革命のソビエト等との区別は明確でない。

では、氏にとって、運動とはいったいなにか。

## III 本音とその帰結

### ① 純粹民主主義

氏はポーランド『連帯』の運動についていう。「生産や労働の場から欲求や享受、生活や文化すべてにわたるへ自由の実践を、つまり、あらゆる面での自己決定と連帯を創造することを求めている」(P一四七)と。なるほど、『連帯』は「労働者民主主義」を要求している。しかし、それは自由一般ではなく、労働者にとっての民主主義——この検討は必要である——である。純粹民主主義ではない。とすれば、一般的な「へ自由」は「自己決定と連帯」をもとめているのはポーランド『連帯』ではなく、氏自身たということになる。おそらく、これが氏にとっての運動目的であり、近代を主張する氏の本音に違いない。

ところで、この主張をきくとなにか思いだしてはしないだろうか。そう、十八世紀の啓蒙思想家たちである。自由・自己決定・連帯などについての一般的空文句(純粹民主主義)から出発する氏と、古い啓蒙思想家たちの間に、思想上の相違はない。

しかし、十八世紀末のフランス革命で進歩的・革命的役割をはたした偉大な啓蒙思想家たちと、高度な発展をとげている日本独占資本主義のただ中でそれを主張する氏とは天地のひらきがある。

### ② 人民主義

氏は「高度資本主義国では、普遍的解放のために闘うことのできる唯一の能力をもつという意味での労働者階級の革命性が姿を消して久しい。社会に対する根源的な異議申し立ては、しばしば体制の底辺やへ周辺へ押しやられている人民の闘いのなかから生起して

いる」(『クライシス』第十四号、P四〇)とみる。

さしあたって、ここでは「高度資本主義国」で、労働者階級の「社会に対する根源的異議申し立て」の分析はおいでよく。問題は氏が「普遍的解放のために闘う」という意味での労働者階級の革命性」ということをどう把握しているかである。ところが『もう一つの革命』また『クライシス』論文のどこをさがしても、「根源的な意識申し立て」「総体的否定性」ということ以外、なにか一つみあたらない。このことは、「労働者階級の革命性」にたいするマルクス・レーニンの説を無視していることを示す。

「今日、ブルジョアジーに對立しているすべての階級の中で、ただひとりプロレタリアートだけが、真に革命的階級である。その他の階級は、大工業とともにおとろえ没落する。プロレタリアートは大工業のもっとも特有な産物である。」(『共産党宣言』国民文庫、P四〇)

「社会主義がその第一歩である共産主義的な社会的労働の組織は、地主や資本家のくびきを打倒した勤労者自身の自由な意識的規律によってささえられており、さきにすすむべきはますますそうなるだろう。この新しい規律は天からふってくるものでもなければ、善良な願望から生れるものでもない。それは、大規模な資本主義的生産の物質的諸条件のうちから、ただそのうちからだけ成長してくる。この物質的諸条件には、新しい規律は不可能である。だが、これらの物質的諸条件の担い手または伝達者は大規模な資本主義によってつくりだされ、組織され、結集され、訓練され、啓蒙され、きたえられた特定の階級である。この階級こそプロレタリアートである。」(『

偉大な創意』レーニン全集第二九卷所収)

かかる意味での「労働者階級の革命性」は「姿を消し」ていないどころか、現在、発展して存在する。しかし、このことと、労働者階級の革命的決起とは同一ではない——革命党の問題、「共産主義と労働運動の結合」の状態等——。氏はこうした問題をごちゃ混ぜにし、もっぱら「異議申し立て」「総否定性」といったことから、労働者階級の「革命性」をみる。

したがって、氏は「解放をめざす主体とは……支配と管理・収奪と搾取・差別と破壊をこうむっているすべての……階級と階層のなから、自立と連帯を求めて立ちあがる人々の共同の営為として形づくられる。その意味では、この普遍的解放主体は、人民主体」と規定するのがふさわしい(『クライシス』前出P四九)とする。

つまり、氏は「解放主体」を共産主義革命の戦士という見地からではなく、「支配と管理・収奪と搾取・差別と破壊をこうむっている」かどうかの見地からとらえる。かくて、今日の社会で数%の独占によって「支配と管理・収奪と搾取・差別と破壊をこうむっている」九十数%の人々——小ブルジョアをふくむすべての階級・階層——が「人民主体」として規定されていることがわかる。これが、社・共の「反独占人民統一戦線」と基調を同じくするものであることはいくらでもないだろう。

### おわりに

このように、氏の主張は「反近代—コミュニオン連合—人民主体」

として一つの体系性をもって完結している。しかし、その内容たるや——すでにみてきたように——、マルクス、レーニン批判にかこつけて、実際にはマルクス主義の成立過程で葛藤・批判の対象であ

った啓蒙思想、空想的社会主義、無政府主義等の雑多な思想が折中的に導入されているにすぎない。



## クーデターとプロレタリアートの闘い

新自連の檜崎氏が「五四年国体改造論(クーデター計画)をとりあげてから、広範な人々がクーデターをひそやかに口の端にのぼらせている。侵略反革命戦争準備が着々と強化され、「なにかやるのではないか?」の中曽根内閣が登場している現在だからこそ、クーデターの響きが一定の現実性をもって人々をとらえているのだ。しかし他方では、クーデターが現実ばなれしたものであるかの評言も流布されている。そして、諸政党はまともにこの問題を取りあげようとはしていない。実際の真実は、はたしてどのようなものか。そして、プロレタリアートはいかなる態度をとるべきなのか。

## I 八三年の社共の沈黙

今回のクーデター計画の内容や背景はおぼろげなままである。マスコミは簡単な事実経過を伝えるか、あるいは戯画化するかの論調をとりつづけている。だが、すでにわれわれは、クーデター計画の

がない。だが、一見奇妙なことに、一九六三年時にあれほど高揚した反対運動とはまったく対照的な、クーデター計画を「一つのエピソード」に封じこめようとする気配が濃厚に現われてきているのだ。

わが社共はクーデター計画の暴露にいかなる態度をとっているであろうか。「社会新報」は無視をきめこみ、「赤旗」は簡単な発言要旨をのせただけであり(三月五日現在)、マスコミと同一の姿勢をとっている。こうした「六三年」と「八三年」の鮮烈な対比は、この二〇年間の階級闘争—党派闘争の一つの縮図でもある。

六三年の反対運動を領導したのは六〇年安保反対闘争同様の市民主義的「平和と民主主義」擁護であった。この闘いは、一九六五年の日「韓」条約締結をメルクマールとした日帝の国際市場再分割戦への介入が開始されるなかで、必然的に排外主義へと転落・純化していった。まさに、帝国主義のへ侵略・抑圧・反革命への対決一般ではなく、いかなる階級の政府と権力を樹立するかに答えない限り一歩の前進もはたしえない地平に革命運動は至ったのである。六九〇七二年はこのことを如実に示し、同時に、プロレタリアートの革命政府と権力を樹立するためにはいかなる単一非合法党を建設しなればならないのかを直截に問うた。この過程は他でもなく、政治とは異なる手段をもってする政治の延長・独自の法則をもつ技術としての軍事問題、これへの実践的かつ実体的解答をも要求したのであった。

こうした革命の根本問題をめぐる党派闘争の中で日本共産党は、「資本主義の民主的規制」「軍隊—自衛隊の民主化」等を内実とする反帝・反独占の国民連合政府論を純化させ、ブルジョアジーと一体になった革命的左翼への破防法攻撃(「成田治安立法」を見よ)を

内容を示す例として「昭和三八年度統合図上防衛演習(三矢研究、または三矢クーデター計画)」と、一昨年の「有事法制研究中間報告」を受けとっており、日帝・ブルジョアジーの攻撃の大枠を知ることができると。参考の一つとして三矢研究をあげれば、「朝鮮半島への侵略反革命戦争、それと連動した戦時立法体制——戒厳令・軍事クーデターの遂行」という青写真をもっている。この青写真は、「戦後の総決算」と六九〇七二年の決着づけをかけた現在の侵略反革命戦争準備のなかで、よりいっそう、国際的に体系化されち密化されていよう。

七七年十月に日帝・福田が有事立法研究開始の「お墨付き」を自衛隊・防衛庁にあたえて以降、環太平洋諸国およびNATO等との軍事交流は拡大の一途を公然とたどり、日米「韓」反革命軍事同盟への飛躍が文字どおりなされつつある。このような情勢からして、今日の自衛隊クーデター(逆クーデター)計画が一九六三年時の三矢研究をはるかにしのいだ内実をもっているであろうことは、疑う余地

の先兵、したがってまた、侵略反革命戦争の先兵的役割をはたしている。国際階級闘争の深化と発展の現実には、あれこれの超階級的(階級調和的)政治の単なる破産ばかりでなく、この二〇年をへて、あれこれの市民主義的「善意」の犯罪性をも宣言しているのである。社共がクーデター計画に示す実質上の沈黙は、今日の階級闘争—党派闘争の中心問題が「政府—権力問題」にあり、したがって、確固としたプロレタリアートの革命政府と権力—プロレタリアートの軍隊の建設への態度が不可欠であることを逆証しているのである。この根本問題への態度をぬきにしたあれこれのクーデター計画反対運動は、多かれ少なかれ社共と同化する道を歩むものであり、歴史を少なくとも二〇年は逆転させるものである。

## II 国際階級闘争に占める

## クーデターの位置とプロレタリアートの教訓

八三年に入ってすでにサウジアラビアのクーデター未遂が報じられ、また、米帝がCIA等を用いて中米での軍事クーデターを八一年に策動していたことなどが暴露されている。ちなみにラテンアメリカで一九四三年から一九六三年の間に起ったクーデターとその未遂件数は六八回ともいわれている。他方、いわゆる先進諸国ではどうか。一九六七年のギリシャ、そしてポルトガルのクーデターがある。

こうした現われは他でもなく、独占資本主義—帝国主義のらん熟と腐朽が生みだしているものである。「資本主義諸列強の国際的資本家団体は、販売市場のため、資本投下地域のため、原料のため、

労働力のため、つまり世界支配のため、様々な政府形態と統治形態を駆使しつづけてきた。国際的な金融独占体の網の目にはやおうなくつながれているすべての国家・民族は、国際階級闘争が現実のルツボの中ですすみます激しく深いものになるにつれて、様々な政権交替を不可避としている。その手段の一つが他ならぬクーデターである。だから、われわれは、ブルジョアジーと反動階級の非合法的政権交替としてのクーデターを、一国・一地域・一民族の枠内ではなく、国際階級闘争全体、とりわけ国際帝国主義との関係でとらえることが要求される。

朝鮮南半部にあいついだ軍事クーデターはその証明の一つであろう。また、スーダンでの六九年のクーデターなど。スーダンのはいは、スーダン共産党が圧倒的反政府運動の高揚下で闘争の前線から逃走し、一定の極右派のまきかえしに「進歩派」将校・軍部が立ちあがってもたらされた。だが、権力をにぎっている実際の階級は大地主・ブルジョアジーであり、それらの反動階級を従がえた帝国主義の軍事網をふくむ国際的な金融独占体の力のもとに右転落を強め、そして、全世界のプロレタリアートが決して忘れることのできない、あの七一年の、革命的左翼への大虐殺をもたらしたのである。この例はチリ・クーデターにもあてはまらう。

これらは、われわれの敵が国際的であり、勝利の条件もそうであることを示す一例である。そしてまた、一国一地域での主体的条件がいかにそなわっていないようにも、一国一地域だけの闘いでは真の勝利が多大な困難をとまわざるをえないことを示している。ここから導きだされる結論は、もっぱらプロレタリアートの革命・共産主義革命の推進のために、国際的なプロレタリアートの間の「完全

ここに全問題の核心がある。

### III 日帝下のクーデターと プロレタリアートの闘い

クーデターの一般的な定義は、支配階級内の非合法的政権交替とされている。軍部クーデター、文民クーデター、そして官中クーデター等からも類推しうるように、ここで用いられている非合法とは議会制民主主義を直接通さないという点で非合法であるにすぎない。ブルジョアジー・反動階級からすれば、資本主義・帝国主義を維持するあらゆる政権交替は彼らにとって合法であり、議会制民主主義から発せられる非合法は単なる外観・形式にすぎない。いわゆる第三世界諸国における種々のクーデターが激烈な暴力形態をとることが多く、それになぞらえてクーデター一般をとらえんとすれば、多かれ少なかれ議会制民主主義・超階級の国家幻想にとりつかれるのは易いこととなる。この見事なまでのサンプルが日本共産党であり、一連の、帝国主義を美化し帝国主義戦争の必然性を否定する路線である。

彼らは、高度に発達した資本主義・日帝下の議会を通じた平和革命の客観的諸条件をいう。それは、野蠻な軍事クーデターを高度に発達した資本主義・日帝下で論じるのが非現実的であるかのようになり、である。しかし、彼らの主観的願望とは別に、日帝はその帝国主義の本質を現下の侵略反革命戦争準備の着々たる強化に示しているのであり、このことは、国家権力構造の実際にもあらわれている。たとえば、産軍癒着とは、退役・退官した国家暴力装置の将校

な信頼ともっとも緊密な兄弟的同盟・新たなインタナショナルの創建と、われわれの「革命的行動の共同とできるだけ大きな統一」を全力をあげておしすすめなければならぬということである。

このような国際階級闘争の教訓と現実にたいして、日本共産党はどのような態度を示しているか。この点は彼らのチリ・クーデターの「教訓」があまりに示してくれよう。

日本共産党は、チリ・クーデターの教訓の主軸を、MIR等の「極左冒険主義」を打倒して軍部内等の民主派を人民戦線へひきつけるという政策におき、チリの「実験」はこの政策を徹底しておしすすめなかつたがために敗北したのであり、この点を内実としてふくむ民主連合政府路線の勝利はますます確認された、と主張している。この主張は、激烈な階級攻防が敗北した後、中間主義・調停主義——つまり日和見主義者によって常用されてきた二つの清算主義的公式——「右翼日和見主義の裏切りと極左冒険主義の挑発批判（左右の日和見主義を打倒せよ）」、「蜂起の条件・情勢の未成熟にもかかわらずらぬ盲動」という空文句を一步すすめたものである。問われているのは、プロレタリア共産主義革命を実現する政府・権力のもとに、党のもとに、「裏切りや挑発」を統制しぬく闘いであり、そのためにいかなるプロレタリアートの陣形を構築しなければならぬいかである。世界資本主義の「危機」や「安定」（情勢）に導かれた政策・方針のもとにプロレタリア・人民を結集させるのではなく、国際階級闘争の全構造との関連のもとで、あれこれの取るにたらないような「事件」を利用して一挙に革命情勢へと転化しぬき、そのようにしてプロレタリア共産主義革命に用意ある、もっぱらプロレタリアートの党組織・プロレタリアートの陣形を構築しぬくこと、

や高級官僚が独占体のトップマネージメントにその位置を定着せしめ、国家の全構造がますます一元化されていることに他ならない。こうした人脈的構造からもあきらかなことは、ブルジョアジー内部の調整能力がいわゆる第三世界諸国等に比べてはるかに巨大であり、資本の利害にもとづく政権交替が易々とおこなわれうることである。そして、このように強固なブルジョアジーの支配の貫徹条件こそが、軍部クーデター等の激烈な政権交替なしに、種々の、公然・非公然のいわゆる文民クーデターの形態で資本主義・帝国主義の維持を可能にさせている。現在の国際階級闘争が帝国主義戦争の火種を広く形成している中で、高度に発達した資本主義・日帝のもつ客観的条件は、日本共産党の願望とまったく逆に、侵略反革命戦争への突入が易々となされる関係にあることを示している。日本一国だけの利害や、戒厳令・軍事クーデターがもつ両刃の剣としての懸念などをこえて、世界資本主義を維持する見地から、日帝があらゆる暴挙にでて露ほどの不思議もないであろう。

このような現実のもとで、日帝の侵略反革命戦争を「文民統制」しうるかのごとく宣伝するのはまったくの犯罪であり、また、いわゆる第三世界諸国や朝鮮南半部等のクーデターや様々の侵略のうえに成立している日帝下の「平和」を誇らしげに語るのには、日帝・ブルジョアジーの階級支配を揺がしえぬまま苦闘するプロレタリア・人民を愚弄する純正な排外主義のなにもでもない。

以上のような日本共産党の態度は、彼らの「敵の出方論」によりはつきりとみてとることができ。周知のようにこの主張は、現実の運動があらゆるレベルの暴力形態をともなつて進行している中で、合法主義・議会主義の道を断固としてすすむ点をもっぱらの核心に

している。「暴力革命（一あらゆるレベルの実力闘争）にたいする  
平和革命」「非合法組織にたいする合法組織」といった主張は、党  
内論争・闘争を圧殺してますますブルジョアジーへの屈服を促進す  
る、重要な一つの道具となったであろう。だが他方では、蜂起・内  
戦・革命戦争をもって展開されている現下の国際階級闘争の舞台で、  
「敵の出方——目には目を、齒には齒を」といった闘いを全面的に  
批判しえないことも事実である。この現実にたいして日本共産党は、  
六九〇七一年に明確な態度を示した。他ならぬ革命的プロレタリア  
人民にたいする武装反革命の行使によって、である。そしてこの行  
為は、敵の出方論にもとづいて合理化されたのである。現実の  
運動——階級闘争・党派闘争を反革命的セクト主義のマネーバーで  
やりくりする格好の御宣託が、敵の出方論である。われわれプロ  
レタリアートは、党の名において発せられる種々の宣言や決意をよ  
くよく吟味してかからなければならぬわけである。徹底したブル  
ジョア国家―権力への屈服と革命的プロレタリア・人民にたいする  
反革命暴力の集中、これが敵の出方論の実際の本質に他ならない。  
日本共産党の敵の出方論の以上のような簡単な批判からもあき  
らかなことは、彼らのへ綱領・戦術・組織を全体にわたって批判  
しぬき、スターリニズム党組織を困り、万里の長城を破砕して党  
諸組織と大衆諸組織との実際の結合をつくりあげなければならぬ  
ということにある。この中心的な闘いをあいまにする限り、日本  
共産党とその亜流どもをプロレタリアートの隊列からたたきだすこ  
とはできず、プロレタリアートの国際連帯を組織しぬくこともでき  
ない。まさに、われわれは、八〇年の光州蜂起にいかなる連帯の闘

いを組織したかを自らに問いつづけなくてはならず、真に階級的な  
国際連帯を組織しぬく単一非合法党建設の内実を強化・拡大しなく  
てはならない。

かの光州蜂起にたいし多くの支持表明はなされた。そしてまた、  
蜂起を生みだした朝鮮南半部の資本主義の成熟による階級闘争の高  
揚が承認された。これらの支持や承認は首尾一貫させられているだ  
ろうか。多くのばあい、否である。光州蜂起の勝利が三矢研究の実  
現へ朝鮮半島への侵略反革命戦争、それと一対となった戒厳令・軍  
事クーデターの遂行であることには都合よく耳目をふさぎ、蜂起  
の支持や承認と同時に、帝国主義的域内合法のもとでのへ内閣危機  
↓政府危機↓革命情勢なる見取図をもてあそんで恥じない少な  
らぬ部分があるからである。

もとめられているのは、国際帝国主義・ブルジョアジーの軍事力  
や、非合法攻撃のもとでも断固としてプロレタリア・人民を動員  
しぬいていく闘いである。すなわち、プロレタリアート・党直轄の  
赤軍に指導された全人民の武装を組織し、プロレタリアートの独裁  
を樹立して人類史前史に決着つけていく闘いである。そして、この  
ような闘いの重要な一つは、国境と民族的障壁をこえた実際の共  
同行動によるプロレタリアートの階級的共感である。この、民主主  
義的連帯一般以上のあるものこそ、排外主義・民族主義と真に  
闘いぬいていくうえでも、プロレタリアートには絶対に必要である。  
われわれプロレタリアートは、このような闘いを組織する「火花」  
として自らをうちきたえていかななくてはならない。





## 綱領関係文書の公表について

次の一文は、第一回代表者会議に至る過程で作成された諸文書のうち、綱領関係文書を五分冊にわけ公表するにあつた序文である。これらの文書はすべて、党内機関誌に掲載されたものであり、また第四分冊は直接党内論争の形式をとっている。しかし、これによって、われわれの主張がどういった理論論争を前提としているかは十分に理解できる。「火花」読者諸君が、これらの諸文書からも、われわれの主張・現実についている態度を實地に点検されんことを切望する。

ここに、五分冊にわけて刊行するのは、われわれの綱領(草案)の、とくに原則的部分にたいする解説といふべきものである。綱領(草案)の、とくに党派論争上の特徴は、これらの文書によつてより一層鮮明にならう。

五つの文書はそれぞれ執筆された時期が異なっている。それらは「火花」特別号(第十七号)で基本的に明らかたされたわれわれ自身の闘いの歩みと密接不可分であり、その意味で各文書のねらいも異なっており、統一性に欠けるところがある。にもかかわらず、綱領を作成し、われわれのものとする闘いの中で書かれたものであり、その重要な一環であつたといふ共通の性格をもっている。

第一分冊は、原則部分の前半、いわゆる古い資本主義に関する部分の解説である。一九七五年末、綱領から党を確認点として再編集して以降、それまでの田原理論への傾斜を総括しつつ、綱領(草案)原則部分の前半部とともに作成されたものである。「序」なぜ、プロレタリアートの革命か、「綱領草案の構成について」に、われわれの綱領観・立場はもつとも鮮明に示されている。

「ただもつばら、ひとりプロレタリアートだけを革命的階級とみなしていること、だから、われわれの任務をもつばらプロレタリアートの革命をこそ勝利に導き、共産主義社会を建設するための指導という点に集約している」点は、その後の原則部分の後半や、実践的部分を作成していく際の導きの糸となつたのであり、われわれの党活動全体を貫く一本の赤い糸である。

なお、この解説は第四項までの解説までで中断している。この点の補足の意味もふくめて第五分冊がある。われわれがなお田原理論の強い影響下にあつた時期——とはいへ、われわれは、田原理論の欠陥が、資本主義にたいする根底的批判の点(綱領原則的部分前半)に顕著に現れており、そこを結びついてあれこれの未来学的傾向をプロレタリアート独裁・共産主義論領域、あるいは、綱領の実践的部分に強く示している点にあること

に気づき、克服せんとしつゝあつた。第五分冊文書はその作業の一つでもあつた——に執筆されている。この点で今日からみていくつかの欠陥がある。だが、この文書の意義は、連合赤軍の敗北以降、なだれをうって進行しつゝあつた清算主義の台頭に断固として闘かかんとしたところにある。清算主義潮流の中心部分であつたいわゆる臨終派(——プロ独編集委員会)の批判は、今日のその末えいたる赫旗派を射程にとらえているといえる。ただ、後日付した「注四」にあるように、当時のわれわれが、一方で、綱領から党、他方で、世界革命戦争路線という二元論におちいっていたことからくる欠陥はまぬがれない。

さて、第二分冊、第四分冊はほぼ同時期に執筆された。綱領から党と、世界革命戦争路線の二元論を、党活動上発生した組織問題の解決・党内論争の組織化の過程をへて克服し、綱領・戦術・組織をあくまで一つのものとして、党活動全体を転換していった時期である。

第二分冊は、綱領原則的部分後半の解説といふべきものであり、あくまで生きた現実を批判するものとして、へ帝國主義——現代過渡期世界へ批判を貫こうとしたのである。第三分冊はこの作業の一環として、ソ連への再評価をおこなつたものである。これらの文書からもみてとれるように、へ帝國主義——現代過渡期世界へ批判の領域では、理論的にも、まだ多くの未整理な部分、未解決な部分をのこしている。だが、これらの領域への接近の角度を基本的に確定したものととして、第二、第三分冊は意義をもっている。

第四分冊は、われわれが、綱領・戦術・組織分野にわたる党活動の転換をはかつていく際の一つの重要なテコともなつた戦術論争・帝國主義的経済主義批判の成果である。われわれはこの党内論争によつて、世界革命戦争路線を最後の決着づけたのであり、同時に、その後刊行されるに至る「火花」を貫く政治宣伝・暴露の核心を確定したのである。本文書は「火花」の中にいかされている。

今日、階級闘争のつまりがますます進行する中で、共産主義者の党、他でもなくプロレタリアートの党にとって、政治的民主主義をめぐる問題への態度が問われている。この意味からして、本文書のブルジョア民主主義的偏向と帝國主義的経済主義的偏向への批判は、いまだ意義をもっている。

以上、かんたんに各文書の性格についてのべてきた。これらの文書を、「火花」を武器とした党活動の一つのテコとして活用されるよう望む。

われわれの綱領について

第一分冊

第二分冊

第三分冊

第四分冊

第五分冊

ソ連の評価について

帝國主義批判と民主主義問題

「プロレタリア独裁」創刊号、その「綱領」批判

## 「分裂」集会是なにを示しているか

三・二七 三里塚集会報告

三・二七三里塚現地集会是「分裂」となった。これは三・八において反対同盟が事実上、幹部会派と、実役派に「分裂」したことの反映に他ならない。幹部会派の横堀集会には二二〇〇(主催者発表三七〇〇、警察発表二七〇〇)を結集した。一方、実役派の第一公園集会是二五〇〇(主催者発表六八〇〇、警察発表二五〇〇)であった。

今回の集会是反対同盟の「分裂」まですすんでいる三里塚闘争と党派闘争の現状を、真に階級的・革命的に止揚することを問うていた。

横堀集会是小泉英政氏(反対同盟)の「開会あいさつ」、長谷川たけ婦人行動隊長の「開会宣言」から始まった。つづいて、主催者を代表して熱田一氏(行動隊長)より発言があった。熱田氏からは「分裂という不本意な事態を迎えたが、基本的立場に変わりなく、中曽根政権登場後の、増々厳しい情勢の中で、三里塚闘争の勝利の意味が大きいことを自覚し、農民の立場で闘いを進めていく」として、全国からの支援協力が要請された。また、獄中同志の一刻も早い奪還の訴えがあった。

次に菅沢事務局長代行から基調報告がなされた。それは「反戦・反核の人民の闘いは、最前線であり、皆である三里塚の勝利いかん

にかかっているものであり、その意味でこの集会を踏み台としなければならぬ」というものであった。また、集会后半では、婦人行動副隊長小川むつさんの敷地内とともに闘うとのアピール、そして敷地内小泉美代さん(東峰)よりの「よねばあちゃんの遺志をひきついで闘いを継続する」との決意表明があった。

このように、壇上に立った反対同盟各氏が三里塚闘争十八年の闘いの継承をそれなりに主張していたことはまちがいない。

しかし、「農民の立場」を前面におしたし、権力問題をぬきにしたまま「一坪再共有運動は、闘争の力をつけるものである」としていた点で、三里塚闘争を狭い農民運動に歪曲しかねない傾向の登場を示している。とりわけ、自主耕作委員会柳川秀夫氏、大地共有委員会石井新二氏等が一坪再共有運動への支援要請を「三里塚大地を解放し、そのことによって広く人民の解放をめざす」と意味付与したことは決して看過しえない。

また、参加諸団体のアピールでは、樋口篤三氏(労働情報)が、「日帝を打倒するまえに中曽根・自民党政府を打倒しなければならぬ」とか「労働者と農民は階級的兄弟であり……」——もちろん、彼には農民をプロレタリアートの側(共産主義革命の側)へ獲得する視点はない——などと発言したのが目だった。これは彼の個人的発言としてではなく、第四インター等の「中曽根打倒——よりましな政府」「労働同盟」の主張の一つとして存在したことを暴露しておかねばならない。

さらに、反対同盟各氏が中核派の指導の誤りを批判した点と結びついて、「反対同盟の主体性における闘いの第一歩」(前田俊彦氏—連帯する会)、「闘う主体の回復」(婦人民主クラブ)等の発言

が、運動をより自然発生性の中に解体する危険性をふくんでなされたことも注視しておく必要がある。

これらの点に関する限り、第一公園集会の方がより原則的であったことは否めない。集会是小川喜平氏(天神峰)の「開会宣言」で始まり、主催者を代表して小川喜吉氏(天神峰)があいさつをおこなった。つづいて北原敏治事務局長より基調報告がなされた。氏は、「農民の農地なくして三里塚闘争はありえない。十八年の歴史を継承して守りぬくことが、反対同盟の進むべき道である」と闘いの方向を提起した。

つづいて、各諸団体よりの連帯のあいさつがあり、これを受けて三里塚農民より決意表明がなされ、成田市議選アピールがおこなわれた。また、中核派、解放派、戦旗派(西田)、蜂起派の決意表明もあった。

第一公園集会の特徴は、「いっさいの話し合い拒否、空港絶対反対」「農地死守・実力闘争」「二期阻止・空港廃港」の「基本路線」それじたいを横堀集会に對置し、またその点から一坪再共有運動を「非妥協的実力闘争の放棄」「農地売りわたし」と批判した点にある。これは反対同盟自身がこの「基本路線」に煮つまる政治的純化をもって、社共・革マルと手を切り、十七年間非妥協的に闘いぬいてきたことを考えれば、まさに彼らこそ、三里塚闘争が日本階級闘争全体の中で果してきた役割の防衛を政治的には代表していた。

しかし、各参加団体をふくむ彼らの発言をみると、もっぱらこの一点で、幹部会派を「裏切り者、分裂・脱落分子」とレッテルばりの弾劾しているだけで、その根拠をあきらかにすることはな

らな一つできていない。もし、このことに真剣に眼をむけるなら、

他でもなく彼らが防衛してきたところの「基本路線」の狭さそのものに気がついたに違いない。

なぜなら、石井新二氏等はこの「基本路線」だけでは条件派と闘争しえないという自覚から——これはまったく正しい——、「農業問題の方針」で補うことをめざして登場しているからである。ただ、権力問題(共産主義革命)との結合を欠落させているが故に、先に述べたように三里塚闘争を農民運動に封じこめる危険性をもって

るので。

この点からいえば、彼らは政治的保守主義として登場しているといわねばならない。

ところで、横堀集会では党派との関係について、「村と村人に礼節を守ってほしい」と訴えていたのにたいし、第一公園集会では「一体となって共同闘争を展開する」と宣言し、各党派が壇上に立っていた点は評価されなければならない。しかし、その中核派に代表される党派が前述のように政治的保守主義であり、戦術主義、血債主義のままでは、闘争発展の力となりうるかどうか疑問である。

ざっと以上が三・二七の状況である。この背景にある要因については『火花』第二号「討議資料」が示すとおりである。われわれは、今回の「分裂」が真に革命的で運動の発展のために必要だったとはみていない。

もとより、三里塚闘争が日本階級闘争に貢献してきた少なくない役割からいって、現在の三里塚闘争を防衛し発展させることはわれわれにとつて義務である。しかし、かかる状況の中では一般的な再統一の主張や、「人民内部の矛盾として解決せよ」といった主張は無意味で小供じみたことに他ならない。

いま、三里塚闘争の防衛・発展にとって必要なのは、社会党、革マルや、日本共産党への追従を深めている第四インター等の「連帯する会」の潮流を根本的・徹底的に批判し、その政治の質と量によって中核派の限界を突破する以外にない。

この日、第一公園集会では五・二二、横堀集会では九・一五の現

地集会を発表し、それぞれ政治的分岐の促進をめざして情宣活動にとりくむことを表明している。われわれはこの動きに、プロレタリアートの国際的統一と共同行動、プロレタリア革命政府・ブルジョアジー収奪等のスローガンを掲げて介入し、自己の責務をはたすであらう。

## 火 花 第二十二号

発行日 一九八三年四月一日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 三〇〇円

火花 第 22 号

発行日 1983 年 4 月 1 日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 300 円